

## エッセイ

## やじ馬昆虫撮影記

(その2 春の女神, ギフチョウ)

千葉大学大学院 准教授

野村 昌史 (のむら まさし)

「春の女神」と言えば昆虫好きの人ならすぐに「ギフチョウ」と答えるだろう。日本に土着しているチョウは約240種とされるが、早春にだけ出現するチョウはツマキチョウなどほかにもいるものの、やはり春の女神と言えばギフチョウにはかならない。

子供のころ、図鑑でしかギフチョウを見たことがなかったが、いつかは本物に会いたいものだと思っていた。小さいころから昆虫が好きだったものの、捕まえても飼育するのが好きで標本にすることはなかった私は、食草や休眠が長い生活史で飼育するには敷居が高いギフチョウを自然に避けていたのかもしれない。また当時は既に近所で見られるチョウではなかったのも確かだ。

時は流れ、大学で自然観察のサークルに入った私は、フィルム一眼レフのカメラを手にし、あちらこちら出かける日々を送っていた。そしてそのサークルの恒例企画であるギフチョウ観察に出かけたのだ。場所はギフチョウ観察地としてはまさに王道といえる岐阜県の谷汲で、当時走っていた名古屋鉄道谷汲線の終点で下車して、そのまま駅宿し翌朝から観察するというあの時代らしい企画であった。

満開のサクラが咲き乱れる穏やかな日射しのなか、ギフチョウは舞っていた。サクラをバックに優雅に飛ぶその姿は、まさに「女神」だと実感した。そして林床のカタクリを訪れ、カンアオイに産卵する姿は、生命の躍動を感じるものであった。ただカメラマンとしては初心者であった私は、この感動を伝える満足な写真を残すことはできなかった。それでも満開の桜並木の間をゆったりと飛ぶギフチョウの姿は、今も脳裏に焼き付いている。

いつか再びこの目で見てみたい幻想的かつ鮮やかな光景である。

いつの日か・・・と思いつつも、4月初旬は新学期で何かと忙しい・・・とてもギフチョウを見に行く時間はないと諦めていた。しかしあるとき友人が「近場の」ギフチョウ観察に誘ってくれた。有名な場所らしいが、神奈川県に発生地があるという。神奈川なら日帰りが可能である。休日に喜んで出かけたのは言うまでもない。

その日は天候にも恵まれ、まだ明るい林の中でひらひらと舞う女神の姿を見た・・・実に30年ぶりの対面であった。今回は以前と違ってサクラ並木はなく、カタクリも多くない場所であったが、枯れ葉で休んだり花の蜜を吸ったりするギフチョウの写真を撮ることができた(図-1)。たとえ環境が違って、嬉しい出会いだった。

こうして久しぶりの再会に満足して山を下ったが、ふもとのサクラの樹にギフチョウがいるではないか。まさにサクラの花から花へ蜜を吸っている姿であった。慌ててカメラを構え、写真に残すこともできた(図-2)。

童謡「ちょうちょう」では、「菜の葉に飽いたら桜にとまれ」と歌われているが、私はこの歌の主人公であるモンシロチョウが、サクラの花に来ているのをまだ見たことがない。でもサクラの花を訪れ吸蜜するチョウがいることを知った。しかもそのチョウが春の女神ギフチョウなのだから、何の文句もない完璧な場面であった。

さて、ギフチョウと言えばカタクリへの訪花、というのが定番のシーンであるが、未だにこの撮影ができていない。「見たい撮りたい」はまだまだ続く。



図-1 枯れ葉で休むギフチョウ



図-2 桜の花の蜜を吸うギフチョウ